

# くまざさ



第 4 号

発行

会 窓 同 湖 路 釧

日 行 発

昭 和 56 年 8 月 9 日

題 字

組 村 真 平 同 窓 会 会 長

印 刷 所

藤 田 印 刷 KK

## 湖陵合唱部(四十八名)

### 全国大会初出場

#### 陸上部八名も

八名が入賞、全国大会に駒を進める。

四〇〇米 六位 佐々木(2)

五一秒 F

一六〇〇米 R 五位 清藤(2)

野口(2) 畑毛(2) 佐々木(3)

三分三一秒三

三段とび 六位 吉崎

一三米 一八

やり投げ 三位 佐藤(3)

四九米七八

昨年十一月九日、釧路市民文化会館で行なわれた高等学校文化連盟主催の音楽コンクール合唱部門で、本校合唱部が見事、全道優勝の偉業をなし遂げ、秋田で行なわれる全国大会への出場権を獲得した。

全国大会出場は、本校の文化系の部の中で、団体では例がなく、これが初めて。全校をあげて、この快挙に喜んでいる。

全道大会の参加校は、全道十二支部の中から、えりすぐりの二十八校が出場、きびしい審査の末、この栄冠を止めたもの。

きびしいふだんの練習とチームワークの勝利と、指導の鹿内先生も目を細めている。

指揮は指導の鹿内直先生、ピアノ伴奏は飯間仁美さん、曲目は、岩間芳樹作詞、広瀬量平作曲、混声合唱海の詩より、「海の子守歌、海の匂い」。

なお全国大会は、きたる七月二



十七日から六日間にわたって、秋田県民会館で開かれる。本校からは、四十八名が出場、出演日は、七月三十日となっている。

また陸上部も、部はじまって以来の大量の全国大会出場を果たした。去る六月二十六日から三日間にわたって岩見沢で行なわれた高体連の陸上競技大会において、次の

監督は熊谷修先生、横浜で行われる大会には、好選手ぞろいなので、良い記録が期待できるとの事。



# 私の夢

校長 中村 力

昔、私の母が育ち、後に妹一家も住んだ釧路の街に、もう一学期を終えてすっかりなじみました。

生気溢れる湖陵生の為に、あれもこれも手がけたいという思いは同窓の皆さんに負けないつもりです。よろしくおねがいます。

創立満七〇年となる五八年三月を間近にして、同窓会記念館建設の企画があることを着任早々に耳にし、大変嬉しく思っています。

私の見た限り、本校の校舎は狭い上にかなり老朽化しており、近い将来の改築に向ってそろそろ動き出すべき時期かと思われま

す。ですから記念館建設についても将来を見越して最良の位置を選んで、さきに同窓会のご努力で道新から寄贈いただいた用地を見合う

ところを決めるのも私の仕事かと思ひ、すでに関係方面のご理解を得ながら検討しております。

手狭な校地とはいえ、この湖陵の地にあつてこそ湖陵高校であることを考えると、記念館問題

はおのずから本校の将来構想の写真にもつながり、私の夢をふくらませてくれます。

三つほど作ってみた校舎の試案の中には、太平洋に向つて羽ばたく鷲を象どつたものもありますが、建築費がかさんで無理かと思われ

ます。また、独立したテニス、ハンドボールのコート。多少重なる野球場と陸上・サッカーコート。

駐車場、自転車置場、クラブ部室そして記念館敷地を確保するとすれば、校舎はコンパクトで力強い

稲妻型、四階一部五階建約一万一千㎡で、うしろに第一、第二体育館と格技場を配したものが良いか

と思ひ、何とか九月頃までに模型を作ろうと考えています。

いづれ同窓会の方々にも私の夢を見ていただき、これにマッチした記念館を考えていただこうと思つております。



# 雑感「創立七十周年」

組 村 真 平

「湖陵ヶ丘に七十年の歳月が流れ、この学舎を築立つたもの、既に一万五千有余。或いは郷里の礎石となり、或いは中央に活躍し、

それぞれ湖陵魂を発揮して、社会に利するところ多し。即ち、創立七十周年を記念し、ここに一大祝賀会を催せんと欲す。」

さしずめ七十周年を記念して何かやる場合の案内状の冒頭の書き出しはこんな具合なのかなと考えながら、ふと疑問を生じた。

人間なら七十才が古稀である。元気で長生きしたということ、お祝の理由がある。会社なども倒産せず繁昌して七十周年を経過した

ということ、これまた、お祝の意義がある。

然し学校の場合、果して祝賀の意味があるのか。廃校にならぬ限り学校は永遠に存続する。火事で

焼けても同じである。七十年経つたからといって本当におめでたいのか。

七十周年を記念して同窓会館を建設しようという企画があり、建設小委員会が今、懸命に検討、努力している。が校舎の改築構想と

の兼ね合いで建設予定地が二転三転する。不景気な世相を反映して寄付集めも難渋が予想され、予想金額の多募で規模構造も左右される。仲々結論が出ず、考える

だんだん頭が痛くなる。つい七十年の意義に疑問を呈したりしたくなる

が然し、決めたことはやらねばなるまい。七十年という丁度区切の良い時に居合わせた我々の責務を考え、何とか実現を期したい

と思ふ。同窓諸兄にも将来の寄付に対する充分なる御覚悟の程を今からお願いする。それと記念式典

を会館完成のからみから数え年ではなく満年齢で計算し、再来年の九月に予定するよう提案申し上げ

る。御検討戴きたい。

## 在京釧路会

- 会長 横山 巖 (釧中9期)
- 副会長 竹田 徳義 (釧中11期)
- 副会長 波岡 正治 (釧中13期)
- 幹事長 佐川 和美 (釧中30期)

## 成田商店

釧路市南大通り3の1の9  
☎41-2874

成田 竹治 (釧中30期)

# 43 当世湖陵生気質

## — 同窓会を

## どう見ているか —

マンガは一週間に一冊以上、新聞は一日に一七分くらい目を通しテレビは二時間近く見る。打込めるものが見当らず、一番落ちつける場所は自分の部屋、さらに、自分自身はまわりの人から「やさしく」見られたく、またそれを求める……昭和三〇年代後半から四〇年代に生まれた若者たちの意識調査の結果である。現代の高校生はこの年代に生まれ、育っている人である。

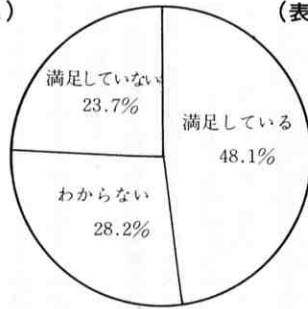
「当世湖陵生気質」をまとめるにあたり、湖陵高校生一年、二年三年の合計一三一名に十二項目よりなるアンケート調査を実施し、その結果をもとに分析していく。

### 「意気天を突く」

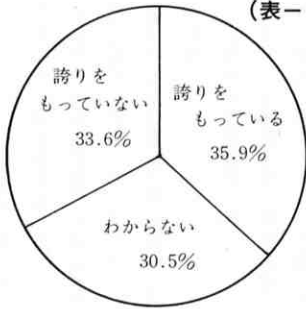
質問一、あなたは湖陵高校の生徒であることに満足していますか (表一)

質問二 あなたは日常生活にお

(表-1)



(表-2)



いて、湖陵高校の生徒であることに誇りを持って生活していますか (表二) の結果は次の円グラフの通りである。

学年ごとに分析をすすめると、学校生活に対する満足感も湖陵高校生であることの誇りの意識も、学年が進むにつれて高くなっている。

満足していると答えた割合は

- 一年 ● 三三・三パーセント
- 二年 ● 五四・八パーセント
- 三年 ● 五六・八パーセント

の生徒が感激した場面がないと答え、特に一年生でその割合が高いこと(四八・九パーセント)には考えさせられるものがある。アンケートの記入も、二、三人の例外はあるものの、答え方は真面目であり、ものの考え方もしっかりしていると判断して良い。生徒が求める教師像は「きびしく」そして「思いやり」のある先生であり、全体の六七・五パーセントの生徒は、テレビの学園もの主人公である「金八先生」や「仙八先生」は自分たちの理想とする教師像ではないとはっきり否定している。同じ質問を中学生にした結果では、生徒の七〇パーセント以上が金八先生、仙八先生タイプの教師を理想としたのとは対称的で、ここに、高校生としての心の成長、真実を追求するきびしい姿の一面を見たようで、後輩諸君に次代を背負う意気込みを感じる。どのような時に「愛校心」を感じますかとの質問に対しての答えは、我々が予想した通りの結果であり、昔も今も大きなちがいはないようである。参考までに多いものから順を追って書くと、

- 一、湖陵祭や体育大会
  - 二、高体連への出場
  - 三、宿泊研修
  - 四、テストが終わった時
- などをあげているが、全体の二七・五パーセントにあたる、三六人は、

- 一、野球などの全校応援
- 二、古い校舎

航空写真測量から土木設計まで—  
東邦測量株式会社  
東邦地図管理株式会社

釧路市宮本1丁目2番4号 ☎41-8723  
(出張所 東京・札幌)

代表取締役  
井上 淳 (釧中29期)

郷土の酒 福司  
敷島商会

釧路市住吉2-13-23 ☎41-3302

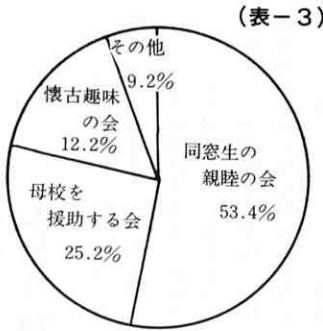
梁瀬 誠也 (釧中29期)

- 三、大学の合格発表
- 四、クラブ活動の練習
- 五、湖陵祭

などをあげている。「いつも愛校心を感じる」という生徒が女子に数名いるのに対して、「全く愛校心を感じたことはない」と答えた生徒が二六名（一九・八パーセント）ある。

### 「同窓会について 思うこと」

「同窓会」とはどのような会だと思いますか、その質問に対する生徒諸君の答えは次の円グラフのようである。



広辞苑によると、同窓会とは「同じ学校または同じ師について学んだ者の会」と書かれているが、なを目的として、どう活動すべ

きかについての定義は勿論なされず、同窓会のあり方についてはいろいろな意見のあるのは当然であり、表一三のグラフはその縮図のように思えて興味深いものがある。

在校生の生徒諸君の四七・三パーセントは釧路中学、湖陵高校の古い時代の話しをいろいろ聞いたと希望しており、昔と今の橋渡しの役目を果たすのが同窓生、同窓会の役割であろう。

湖陵高校の古い先生や先輩の話しや、昔の学校の様子について聞いたことのある生徒は三分の一の三七・四％いるが、聞いたことのある話しの大部分は学校が火災になったことのみである。湖陵高校の名物先生や先輩のこと、伝統的な学校行事のこと、釧中時代のもろもろの逸話は全く伝えられておらず、生徒は校舎の古さのみに伝統を感じていると結論づけるのは性急であらうか。我々の同窓会報である「くまざさ」を生徒用黑板报に掲示するとか、新聞の切り抜きや記録、写真などを文化祭の時に生徒に公開する……などの手だてが急がれる。釧路の風土に根ざした湖陵高校の良き伝統とはな

にかを、卒業生、在校生が共に考

えて見るべき時である。七十周年をひとつの節として、

同窓会がどのような活動をしていくか知っていますか、との質問に対して知っていると答えた生徒は三・八パーセントの五名のみでその知っている内容としては、入学式の日にはバレーボールをくれた街頭放送で校歌を流し、同窓会の案内をしていることがその全てであり、入学式や卒業式に同窓会長が挨拶するだけのつながりでは、儀礼的・形式的であるとの批判もあるが、そこが、同窓会などの任意団体の活動の困難さである。それをいかに克服するか、その方略を試行し、模索する年になってほしいと念願する。

同窓会報に「くまざさ」という新聞のあることは九五・四パーセントの生徒は知らないと言え、知っていると言えた六人の生徒も見ただことはないという。五十五年度の同窓会総会における青木旧校長の「湖陵同窓会の力は誠に大きく今まで味わったことのない母校をつつむ同窓生の温い心を感じる」のことはある学校として同窓会に寄せる期待は、開校七十周年をむかえようとしている我母校、湖陵高校には大きなものがあると思

う。今後も、在校生に多大の感銘を与えた湖陵記念館での講演会のように、先輩と後輩の接触の場を多く設け、同窓会館建設小委員会を中心となって検討している同窓会館を我々の手で建設し、広い年代層、地域に根ざし、多くの人々に親しまれ愛される同窓会、同窓会報に対する方略は是非必要であることを強調したい。

(文責 附属中・岩本)



## 藤田 歯科医院

釧路市末広町9丁目  
☎22-8055

藤田 豊 (釧中29期)

## 航空写真・航空測量・都市計画測量全般 日航建設コンサルタンツ(株)

釧路市宝町6の2 ☎24-5664

<本社> 東京都太田区上池呂4の2の6  
☎(03)775-8531

代表取締役社長 千葉 敏 行 (釧中30期)  
釧路出張所長 小野 重 和 (釧中30期)

釧中32期 奥田達也

「師弟愛の胸像」

二代目校長阿部与作、渾名はベアさん。ご自身はアベを逆さにしたと思っておられたが、その風貌歩き振りから熊さん。訳してヘアとつけられたらしい。群馬県出身。東京高等師範の地理歴史部を卒業。釧中の開設に、妻子ともども着任する真面目人。初代教頭・寄宿舎舎監となり、生徒の面倒をみるこ

阿部校長の愛・裏目に

寮生が春採湖水で墜溺

「どうだい、春採湖へ行かんかい」と渡辺清が悪戯っぽくささやく。張りつめていた緊張が破れた。その誘いを受けたのは秀才を任じている一回生二年の山口直光である。父親の監督書記直太郎が帯広区裁

す。近くの渡辺が、それでもようやくにその一つを掴み引き上げられた。帯の先に石をつけて投げてやることを考えついたがすでに遅し。濡れ着物のまま渡辺は疲れた足で丘を駆け上り舎監に告げた。丁度その頃、警察署では九時の朝礼で鴨下署長が署員一同に、「本年は気候温暖にして、例年とは異なり、氷は厚紙の程度であり春採湖上を渡ることは危険であるにもかかわらず、聞くところによれば、ここ数日、学生どもが、氷

判所転勤で寄宿舎に入っていた。ほかに池崎(のち播磨)嘉蔵、塩川勝も英雄心にかられて応じる。舎監への甘えも当然にあった。下駄スケートをはいて氷上を滑る。山口に続いて渡辺が湖水の中央に近づいた時、氷全体が沈むようにピシピシと陥没しはじめた。二人は慌てて岸へ帰えろうとするが、大きく傾斜さえして引戻され氷は割れて二人を呑み込んだ。池崎と塩川が急ぎ岸に上がり、帯を解き、その端を彼らに投げ渡そうとするが、向い風はそれを吹き戻

滑のため……」と訓示の真最中、三〇六番の電話が鳴った。釧中生墜落溺死せり、と。一方、悲報に阿部舎監、寮生、登校の生徒、先生ら皆が湖畔の崖を駆け下りる。試験第一日目の朝は灰色に塗りつぶされ、湖畔に集まった人々に顔色はない。

日曜の前夜、湖尻を切つて水を流したため、氷と水面のあいだに空間ができ、薄さに加えて割れ易い条件下にあったのだ。阿部舎監兼教頭の額には寒さにもかかわらず脂汗がふき出す。

小舟を氷上へ出し、藻草の根元に沈んでいる山口を引揚げ人工呼吸、摩擦をするも、すでに心臓は動かず、まなこは開かなかつた。藤警察部長と松兼医師の検死後死体は舎監に渡された。責任感の強く、愛情深い彼のショックは大い。対外交渉の不得手な彼に葬儀、関係者への挨拶、両親へのお詫びなど、それは冷酷である。だがそれに耐え、なし遂げたのだ。一緒に脱走して滑りにいった三人の生徒を全く叱りほししない。

しかし、全校生徒のスケート禁止は長く続いた。甘やかして育てた自責のせめてもの鞭であつた。このときの生徒の一人播磨嘉蔵が校長の死に接し、在釧有志の山本、渡辺、米内、嵯峨、野尻、豊島らを動員して湖陵倶楽部をつくり会長として初回の胸像建設に奔走、除幕式に式辞をのべた。八百の湖陵健児が感動のすすり泣きをしたのも、右の事業を知られば、むべなるかな、と思われる。

更に大正八年一月には、この阿部校長に伊藤郷一らが宣言書をつきつける、いわゆる「校風刷新事件」が起きる。その伊藤が初、二回と碑文を書き、いま在る胸像再建をなすのであつた。

開校翌年・大正三年冬、釧路は暖かかった。湖水を渡る人が割れて落ちることもしばしば。そんな師走七日の朝、寮生は早く起きて当日の試験勉強をしていた。舎監はそうした寮生の心境を

一内科・胃腸科・脳神経外科

外科・整形外科

谷藤病院

釧路市双葉町3番15号 代22-7111

院長 谷藤 和弘 (釧中29期)

一 特定建設業

白崎建設株式会社

<本社> 釧路市城山1丁目10番5号 代41-0288

代表取締役社長 白崎 功一 (釧中29期)

# 当番期紹介

## 釧中29期の絆

— 会旗・名簿  
そして会報 —

編集委員会より第三号の中村衛会長の当番期紹介とだぶらぬように書いて欲しいとの依頼があったので、会長の述べた概要を行数する形で述べてみたい。

先ず同期生名簿があるが、今年八月中には各地へ発送される予定である。聞く処に依れば、この名簿が取次ぐ形でお互いに連絡がとれているとのこと。昨年は在京の同期生諸氏が在京同期会を盛大に行なった由。その詳細な模様はやがて送付されることになっている。

又、会報はやがて五号発刊の準備中である。昨年は二八期の名倉先輩より写真をお借りして、卒業して三五年ということに記念号的色彩なものを発行し、同期生諸氏には卒業写真と共に校舎・校旗などの写真が深い感銘を与え、懐旧の情に浸ること筆舌に尽し難しか

ったようだ。本年も昨年に引続いて、忘れ得ぬ写真の掲載を計りたいものと考慮中である。

先輩二八期は素晴らしいアルバムを作製された。会旗の他に我々の期にも是非との声が大い。やがては資料を整え、先輩に肖りた」と願っている。

## 厄年も過ぎて

(湖陵九期)

申年の男女が数名ずつのグループとなって、ネオン街へ消えています。くしろの六月の夜風が、ほろ酔いの頬をやさしく撫でていきます。満四二才の男女五十一名による酒宴が、今おわたところなのです。

じつのところ、二〇名も集るかどうか心配したのでした。しかし四〇名を越えようになったところか

らは、刻々と増え続ける参加者に会場のことなど、心配が増す一方でした。

とにかく、大変なことになるのは、はじめからわかりきったことなのです。組織も無く、連絡網さえ無いのに、二〇年ぶりに初めての同期会を開いたのですから。

それというのも、今年には私たちが湖陵九期が、いずれは責任を負わねばならない、釧中・湖陵同窓会の当番期となったからなのです。

さて、この大役をはたすには、何といつても同期の協力体制の確立が必要です。数人の仲間が相談し、とにかく同期会を開くことを決定したのでした。

このところ、我々九期生は、一体となって、釧中・湖陵同窓会の準備に日々にはりきっています。しかも、このことを通して、心よい青春の気持を味わっているのです。厄年も過ぎて、ようやく人生の楽しさなどもわかりかけてきたように思うのです。(柳)

## 湖陵魂ヨ

### 永遠なれ!!

(湖陵一九期)

湖陵にながし五〇年。今なら六

〇年(七〇年かな?)となるのであろうが、私達一九期は、ともかくこの五〇年で始まる応援歌の時代である。五〇年の伝統を受け継ぎ、私達一九期を最後に後輩に受け継がれていない行事が一つだけある。何んであろうかと皆さんはお考えの事と思うが、湖陵と言え

ば嘗ては男子校、男子校と言えは「兎狩り」と言う男ならではの伝統的行事である。雪の中を友と輪になり汗を流して歩いた後のおにぎりの味は、今でも格別の味と記憶している。昔は、逃げる兎と雪

の中の大乱闘を演じ服はボロボロ手や顔は傷だらけと云った学生の光景が、結構あったそうであるが私達の時、逃げ廻る兎をついぞ、一羽も目にしなかったのであるが最終地に着いた場、鉄砲で打たれた兎が、三羽程いただけの事である。真白な雪の中に全生徒が、一つの目標に向かって青春のエネルギーを一杯に出した事は、湖陵時代の想い出の一つであり、自然との

語らいの大切さを知る機会でもあった様に思う。兎狩りは、消えてもそこに流れていた湖陵魂、湖陵精神だけは、絶える事なく綿々と流れ続けてほしいと願うのである

湖陵万才!! (島本)

♥「愛ある日々」私たちの願いです。

出逢いから拳式まで

## 釧路商工会館

釧路市大川町2の5

ご予約は ☎41-9121

人生の喜びは健康にあり

純薬草製  
胃腸良薬

❁ 恵命我神散  
けいめいがしんさん

## ハタノ光栄堂薬局

本店 釧路市浦見4丁目2番8号 ☎41-5336代  
支店 釧路市若松町1番23号 ☎25-5003  
ヨーク店 釧路市新橋大通6丁目2番18号 ☎25-3255

# 在京三同期会

## 釧中 三〇・三一 期 (徳田)

釧中三〇期と三一期は、戦時中の卒業期が分離されただけで本来は同期そのものである。釧路では約五十名が集り盛会である。今年も同窓会当番期としての準備会再来年の同窓会当番期としての準備会を早々に開いて活発な動きを示している。この期には、「札幌くまざさ会」(石井忠雅氏―道新)と「東京くまざさ会」(佐川和美氏―釧新東京支社)の支部のような組織があり、前者は毎年一月と六月に札幌周辺都市の同期生によびかけ定例会を、後者の方は毎年一月はじめに、同期、石黒幹雄氏の経営する新橋の「かに銀」に集合、会を重ねている。今年も一月二十三日に、二十数名が参集し、六時半から十一時半まで、美酒美味によい話に華が咲いた。

当日はじめて釧路から出席した成田竹治氏によると、東京在住の

連中は比較的自由業的な職種が多く、札幌は勤め人が多く多少おもむきは異なるが、皆豪快で人情味は豊か。出る話は、子どもの結婚のことや教育のこと。そして互に責任ある仕事と身体のことなど、ようだけれど変らないのは過ぎた日に強く結ばれた友情のふれあいでありその絆の強さで「近い中に互の会の交流会も」との事。

## 釧中十六期会 (坂下)

五月二十三日、北は根室、南は福岡からと久方の顔が続々と今年の総会々場の江の島洗心亭に集まる。この時間が何といつても一番懐かしく胸がわくわくした、そしてげんな面持ちになる時だ。ある者は卒業以来四十八年振りで会い思わず握手に力が入り涙ぐみ、ある者は「昔の顔が思い出せぬが本物か」と確かめあい、ひとしきり控えの間はうるさいほどの声高に満ち幹事の声も消され勝ち。

定刻在京名幹事藤井近策、三品政夫の司会で総会が始まる。原正直の歓迎の言葉、小生の経過報告に続き橋本俊彦の乾杯の音頭にも力

が入る。飲む程に酔うほどに五十年前の面影躍如とし身振り手振りで思い出話に余念がない。釧路から特産の毛がに、宮地良雄君が特にこの日の為に念入りに造ってくれた思い出多い鶴の子饅頭が食膳に載るや一段と話題が賑やかに全員宿泊の為安心して夜の更けるのも忘れ語り明かす。翌二十四日は青空が広がり鎌倉の名刹を修学旅行よろしくワイワイガヤガヤと実に楽し。三時近く遅い昼食を老舗「鉢の木」の精進料理に舌鼓をうつ。流石美味い。

この頃より別れを惜しむにふさわしくやらずの雨降り始める。元気だと又逢えるぞとお互い手の温みを確かめしぼしの別れとなる。

## 釧中三十二期 (徳田)

釧中三十二期も釧高一期も実は同期である。戦中から戦後の学制改革で、旧制で卒業したのと、新で卒業したのとの違いである。旧制の中には四年卒もあって同期生の確実な数は不明。たまたま、席次二〇四番でピリから二番目と先生から叱られた」という者がいて

一応二〇五名とか。入学から卒業まで机を同じくした連中は皆同期生と考える。会は三十二期をもじって三月二日に一番近い土曜日が釧路にいる連中の定例会でいつも六〇名をこえる出席である。三二だより」という手刷りの通信文を書いて配ってる。三年前に卒業三〇年記念行事として、お座敷列車を使って男沢先生を引卒の先生にしたして札幌方面へ修学旅行へ酒

学旅行となったが、行い釧路に在るものが集って七〇名をこえる旅行となって(会長組村真平氏、札幌青木馨氏、東京小川博氏)これを機に札幌・東京でも会がもたれ、東京では六月六日(これも三十二期を模して3×2116から)東京新宿区東京大飯店で在京三十二年、初の同期会を開いた。在京四十五名の中三十名が根津先生を囲んで青春にかえった。卒業後の動向と自己紹介をかねて……二時間はあつという間にフツとんで、肩をたたき、手を握りあり美酒をかまし、釧路から届いた、松橋の天ぶら」に舌鼓をうち、故郷をなつかしむ。白髪混じりの大オジンも和して唱う。阿寒のお山の浅緑……忽ちにして紅顔の美少年に戻り肝胆相照し大盛会!

道 / 東 / 印 / 刷 / セ / ン / タ / ー



# 藤田印刷株式会社

〒085 釧路市若草町3番地1 ☎22-4165・23-7411

# わが青春に悔なし

野尻 静

昭和の初期から経済恐慌の嵐が吹きまくり、ファッショの怪物が激しく動いていた。やがて軍事教練の科目が実施された。

僕が三年生の時、数学教師の高田先生を中心に、上級生の本間、尾崎等と文学同人誌「北方芸術」を創刊した、学校側はあらゆる手段をもって弾圧を加えた。

僕たちは、榊原生徒監宅に抗議に行ったところ、彼は紺色の詰えりに短剣をさげて応対し、交流は

もちろん決裂した。

榊原生徒監の綽名は鎮南甫とい、いみじくも僕の親父と風貌が似ていたので、生徒が間違ってお辞儀をすると行って親父は苦笑していた。

高田先生は間もなくT学園に転任して行ったが、僕をヒロインに「インテリゲンチヤ」という小説を発表出版した。湖陵学園内の動向や、当時の青春群像が鮮やかに描かれているが、誰もがわが青春にセンチメンタルな悔など今も感

じてはいないだろう。

完く偶然にも、昨日長野市の高田先生から手紙が来て、身体は頑健だが、白内障で苦しんだが、まだ毎日読書をしているそうで、主

として昭和の初期から敗戦まで、日本の政治と軍部の動向そして満州国との関係を一先生は満州に十数年行ったから、先生にとつて

ぜい書かねばならない問題があるらしい。

数学の大嫌いな僕に、ついにあきれて、望外な理解を与えてくれた阿子島庄六先生の家に遊びに行つたところ、先生は奥さんに講談を名調子で聞かせていた。その後僕が懇望して、教室で一席演つてもらつた。

或る冬の夜、僕は阿部校長を訪ねたところ、校長はコタツに入つて菊地寛の「第二の接吻」を読んでいた。話は文学談義に終始し、僕は自分の用件を忘れて、第二の接吻を借りて深夜辞去した。外に出ると雪が降っていた。

## 岩清水 高橋両先生逝く



すばらしさを、向学心のある市民に教えられたことであろう。昭和四十五年、市の成人学校古典文学講座の講師をされたのがきっかけで、「源氏の会」が誕生した。うで、病に伏せられるまでの十一年余も、月二回の例会で講義されたということ。「余韻を含んだ中

私達の大先輩であり、恩師であつた岩清水高先生と高橋林一先生が本年五月と六月相ついで他界された。永年の教職を終えられて、まだ二年足らずの出来事に、ただ呆然とするばかりである。「天道無親、常与善人」は、お二人にはあてはまらない諺である。



高橋林一先生は、湖陵時代を代表する先生である。昭和二十三年から二十年間、社会科で教育され、湖陵二十七日が最後の教え子で、今年一月に東京でクラス会があり先生にとつては最後の会となつてしまつたが、先生の人格の豊かさが偲ばれる。一時、美唄、江別に転勤し、四十九年から湖陵定時の教頭として再び釧路に來られた。独学で書をものにし、退職後は、ジョギングで体力をつけ、書で精神を高揚させていたよう、壁に飾られた「一志貫徹」の色紙の文字が印象的であつた。

両先生の御冥福を祈つて、合掌 (豊島)

### 編集後記

\*「くまざき」編集の話、人ごとのように聞いていたら「お前やれ。」ということになつてびっくり。しかも発行予定日まで一か月たらずとあつて、二度びっくり。同僚の豊島、菊池、岩本教官(附属中)に泣きついて行動開始。

\*さつそく寄稿依頼の電話作戦。スタートは「湖陵が丘」の奥田先生。「まつてました」とばかりに快諾。三日後には原稿到着と超スピードぶり。ぐつと氣をよくする。

\*連載物の「わが青春に悔あり」を野尻先生に依頼したが「(わたしは)わが青春に悔はない。」と一蹴。「……悔あり」が、本号より、「……悔なし」となる。(藤)

編集にたずさわつた人

- 名倉 澁 遠藤 隆吉
- 滝沢 康雄 八幡 弥平
- 藤原 文夫 徳田 広
- 中村 忠太 豊島 弘道
- 菊池 一 岩本 聖司